

クルマエビ

腰部に十数本の紫褐色の縞模様があり、腹部を曲げると車輪のように見えることからこの名がある。味は「エビ類の王者」であり、寿司や天ぷらがうまい。旬は夏～冬。需要が多く、西日本を中心に養殖も盛んに行われている。雌雄異体で、産卵期は5～9月。雌は約70万粒の卵を抱き、遊泳しながら産卵する。成長は速く、1年で成熟する。日本近海からアフリカ東海岸まで広く分布し、国内では北海道南部以南にいる。沿岸から水深約100メートルにかけての砂泥底に生息し、昼間は海底に潜って身を隠し、夜に活動する。

富山県では一時期に比べて漁獲量は減少し、近年は10トン以下にまで落ち込んでいる。主産地は、四方(よかた)、新湊および氷見で、3地区で県全体のほぼ90パーセントを占める。市場に並ぶのは体長20～25センチで、6～8月に多い。刺網による漁獲が最も多いが、底曳網や定置網でも獲れる。

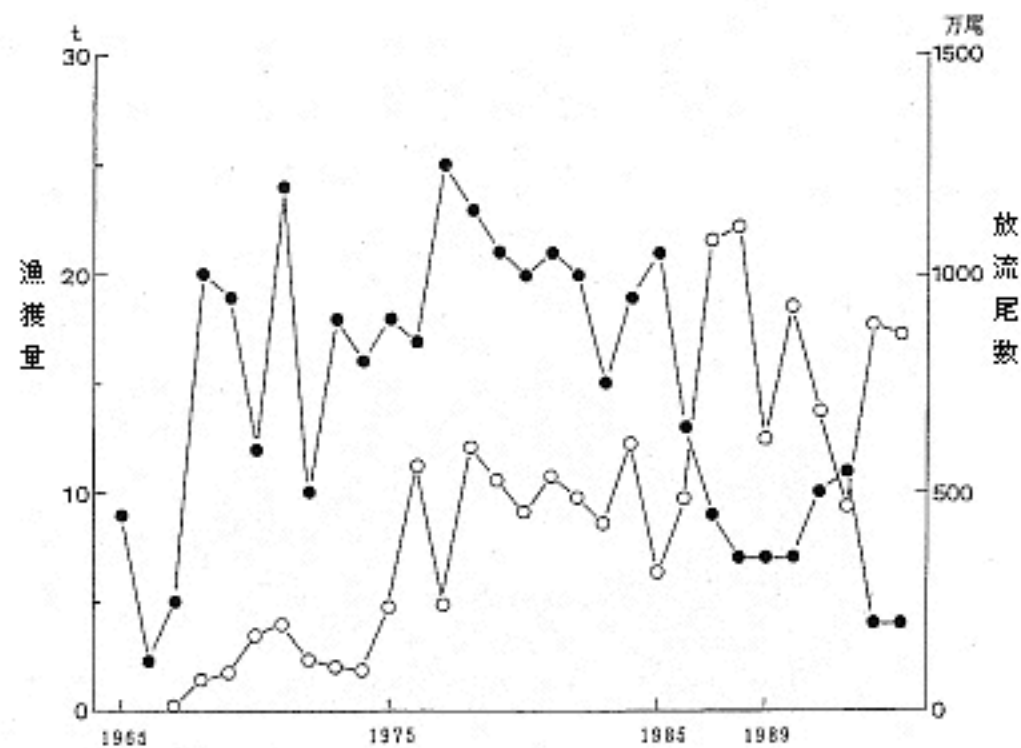


富山県では、1977年から本格的な種苗生産・放流事業を進めている。近年では600万尾前後の稚エビの大量放流を行っているにもかかわらず、漁獲量が減少しており、放流効果が疑問視されている。

クルマエビに限ったことではないが、エビ類の場合、成長に伴って何回か脱皮を繰り返すため、標識をつけることが困難である。このため、標識個体の回収率に基づいて放流効果を推定することが、長い間できなかった。といっても、ただ手をこまねいて見ていたわけではない。地道に飼育や放流の試験を繰り返してきた結果、放流エビの行方を推測するための知見がいくつか得られた。

- (1) 小型種苗(全長15ミリ)には潜砂能力がなく、海に直接放流しても魚などの食害を受けやすい。海岸で囲い網を使って1週間くらい中間育成を行うと、20ミリ程度に成長し、潜砂能力が備わる。
- (2) 大型種苗(30ミリ以上)であっても、直接放流すると浮遊してしまう個体がかかり見られ、食害を受けやすいが、海岸で中間育成(または馴致(じゅんち))を行えば放流後の生残率が向上する。
- (3) 稚エビ(80～120ミリ)を標識放流した結果、再捕個体のほとんどが放流地点付近(6キロ以内)で捕まっている。このことから考えると、移動範囲はそれほど大きくはない。
- (4) 7月に放流した稚エビは、その年の12月に約13センチ、翌年の6～7月には15～17センチまで成長することから、放流後1年余りで商品サイズにまで成長する。

ごく最近、稚エビの尾扇(シッポ)の切除による標識技術が開発された。尾扇の左右どちらかを切り落としておくと、色模様や長さに違いが生じるので、これを見つけるのである。富山県でも、1996年から四方や太田浦で50ミリサイズのエビの尾扇を切除して放流した結果、標識エビが再捕されてきており、漁業者も放流効果を認識し始めている。(角)



富山県におけるクルマエビの漁獲量の推移